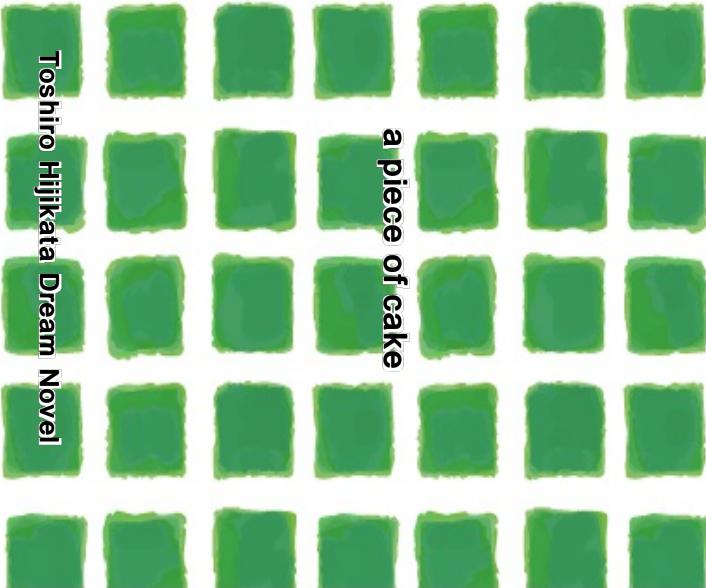


「ありがとうございます。お上手ですね」
「慣れてるだけだ。昔は壊れた草履くらい自分で直して履いてたからな。ほら」
「と、と、土方さんは草履を片手に持つたまま私の前に膝まづくと、私の裸足の足を取った。思わず両手をふって抵抗する。」「ちょっと土方さん！ やめてください！ そこまでしてくれなくともいいですから！」
「なんですか？」
「何でもなにも、皆が見てるところで真選組の副長がこんなことしちゃダメです！」
「ばかだな、誰も見てねえよ」
そう言われて土方さんの肩越しにのぞいてみると、道場は変わらなく稽古が続いている。竹刀がぶつかる激しい音と胃の腑がつぶれるような悲鳴が聞こえたかと思うと、道場の外まで隊士が吹っ飛んでくる。こんなことができるるのは沖田くんくらいだ。土方さんが抜けて手持無沙汰になつた隊士を相手に稽古をつけているのだ。真選組随一の剣の使い手を相手にしていては、確かに土方さんの動向に気を回す余裕はないかもしれない。
土方さんは私のかかとを支えながら、そつと草履を履かせてくれた。まるで、王子様にガラスの靴を履かせてもらうシンデレラみたいに。照れくさくて頬が熱くなる。
「あとは手だな」
「自分でできますから」
「きき手を怪我しどうやつて自分で手当すんだよ」
「稽古に戻らなくていいんですか？」
「近藤さんも沖田もいるから大丈夫だつて」
そう言うと、土方さんはまだ文句を言い足りない私の手を引いて救護室まで引っ張つていった。なんだか子ども扱いを



Thank you for your request!!

魔法ビスケット 5周年企画 SS

「俺の顔に何かついてるか？」
「いいえ。ただ、きれいな肌だなと思つて」
「土方さんはいかにもおもしろくなさそうに顔をしかめた。
「何を馬鹿なこと言つてんだよ」
「きれいですよ。きめが細かくて」
「きめが細かいの意味が分かんねえし、お前の方がきれいだよ。だから怪我には気をつけろよな。痕が残つたらどうすんだよ」
私の手を握る土方さんの手に力がこもる。指先から伝わってきたかすかな震え。土方さんの手の温度が触れたところが、火にかけられた水のようにじんじん熱くなつていく。
ついには顔を真っ赤にして黙り込んでしまつた土方さんは、まるでうぶな少年のように口をつぐんでしまつた。
「自分で言つて照れないでください」